

---

# 水の、ひとしずく

文樹妃

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

水の、ひとしずく

### 【Nコード】

N1069D

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

生まれたばかりの水の、ひとしずく。彼の目からつづる、世界と人間。流れ、巡る水の思いを描いた作品です。

(前書き)

「水」をテーマにした企画小説参加作品です。  
「水小説」(「」なしで)で検索すると、他の参加者の方々の作品も読めますので、どうぞご覧ください。

水の、ひとしずく

僕がいつ、どこで生まれたのかはわからない。

ただ、気がついたら、漂っていた。

漂いながら見渡すと、周りには、僕と同じ姿かたちをした、たくさん仲間がいた。

僕と同じように何も言わずに漂っているものもいれば、何か話しかけてくるものもいた。

そうして漂っているうちに、たくさんの友達ができた。

僕より先に生まれたいらしいその友達は、色々なことを教えてくれた。

僕が漂っているその場所は、川、という名前らしい。

ある友達は、山、という場所から溶けて流れてきたと言っていた。そしてもう一人は、空、という上のほうの世界から、落ちてきたと言っていた。

どこか暗い場所から出てきた、という言葉もあった。

それでもみんな、一番最初にどこから来たのか、という質問には答えてくれなかった。

そう、それは誰も知らないことらしい。

気がつけば、そこにいた、という記憶。

そうならば、僕はこの川にいたのが最初の記憶、なのだろう。

漂ううちに、周りの景色は段々変わっていく。

僕はみんなに教えてもらい、色々なものの名前を知った。

まず、川のそばに並んでいる緑のものは木。

そして上に見えるのは、空、白いふわふわしているのは、雲。

僕は雲を見ながら、なんだか僕らと似ている、と思ったりした。

空は僕らに色々な表情を見せてくれた。  
青く澄み切っていたり、まぶしい光にあふれていたり、燃えるように真っ赤だったり。

それはとても綺麗だったけれど、僕はいつもやってくる、夜、という時間が少し怖かった。

真っ暗で、何も見えない。漂う自分の姿もわからない。それがどうにも不安だった。

でも仲間に教えてもらって上を見ると、少し、遠くに白いきらきらしたものが光っていた。まあるく、黄色いものも。

星、と月、というらしいその光に、僕は少し慰められた。

初めて、雨、というものを知った時には驚いた。

だって、空からたくさん仲間が降ってくるんだもの。

降ってきた、たくさん、僕と同じ形をした仲間は、やっぱり最初は不思議そうに、やがては僕と同じように、ゆっくり、ゆっくりと漂う日々を過ごすようになるのだった。

時々空を飛んでいる、鳥、というものも僕らを楽しませてくれる。大きいものや小さいもの、色々な動きで飛び回り、時には僕らの間近までやってくる。

それから小さな虫、彼らもとっても面白い。

ただどすぐにいななくなってしまうから、少しさびしくなる。

昔はこの川に、魚、というものがたくさんいたらしいけど、今は残念ながら見ることはできない。そう教えてくれたおじいさんは、なんだか悲しそうな顔をしていた。

でも僕には、見たことのないものことはあまり気にならなかった。  
た。

僕が一番気になったものは、時々見える、不思議なものたち。

小さかったり、大きかったり、それは様々な姿かたちをしていて、僕らのそばにやってきたり、遠くに見えたり、するものだ。人間、という名前だと、おじいさんは教えてくれた。

そうしてゆっくり、ゆっくりと流れながら、段々と周りに見えるものは変わっていった。

遠くに少しだけ見えていた建物、という名のものたちが、どんどん増えていき、代わりに木は少なくなっていくた。

建物は段々大きく、高くなっていき、それと同時に、人間もたくさん見えるようになった。

橋、というものが僕らの上をまたぎ、そこにはとてもすばしく動く、いろんな色のものたちが行きかいました。

自動車、というその中から、人間は出てきたり、消えていったりもする。

おじいさんが言うには、建物の中に、人間は住んでいるということだった。

僕はおじいさんに、人間のことを色々聞いた。

おじいさんはなぜだか色々なことを知っていて、僕に教えてくれただけれど、僕がいつも聞く質問には、どこか悲しげな表情を浮かべて、答えてくれないのだった。

『おじいさんは、どうしてそんなに色々知っているの？』

『僕たちはどこから生まれたの？』

『そして、どこへ行くの？』

困ったように微笑むおじいさんを見て、僕はいつしか質問するのをあきらめた。

それでも頭の中には、いつもその疑問がまわっていた。

建物と人間が増えていつて、しばらくすると、少しずつ、川の様子が変わってきたことに気づいた。

幅が段々と狭く、細くなった。

そして、いつの間にかできた、暗い穴に、吸い込まれるように消えていく仲間たちと、また別の穴からは、流れてくる仲間たちもいた。

流れてくる仲間たちは、どこか疲れたような顔をしていて、話しかけても、答えてくれない。そして川の中は、なんとなく、静かで沈んだ空気が満ちだしているのだった。

それでも僕らは漂う。

流れ、揺れながら、行き先も知らない旅を続ける。

そして僕もいつしか、あまり言葉を話さなくなっていた。

そんな毎日の中で、僕はいつしか人間を観察するようになっていた。

だって、それが一番たくさんいて、いつでも見ることができたから。

そして人間たちは、建物と違って、いつも動き、何かをしていたから。

黒い、似たような服を着ている人間たちは、大きな建物に出たり入ったり。

仕事、ということをしているらしい。

それより少し背の低い、それでも同じような衣服で揃えた人間たちは、学校、というところに通っているらしい。

どちらも飽きもせず、毎日、毎日繰り返し返している。

僕らがこうして漂うのと同じような行動なのだろうか。

僕らがいる川の周りには、走っている人や、座っている人、そし

て犬、というやたらに走り回るものを連れてくる人など、たくさんの人間たちが集まる。

その中でも、僕が好きなのは、小さくて、可愛らしい人間。どうやら、子供、というらしい。

嬉しそうに笑って、はしゃいで、歩いたり、走ったり、なんだかとても楽しそうで、そんな彼らを見てみると、僕までが少し楽しくなった。

けれど、そんな子供を抜きにすると、川の近くに居るのは、どこか沈んだ顔をした人が多かった。

疲れた顔、さびしそうな顔、どこか、みんなが遠い目をして、僕らが漂う川を眺めているようだった。

一体、どうしてなんだろう。

彼らは何を思っているんだろう。

それは、あの暗い穴から出てきた、仲間たちのような顔だった。

僕は一度だけ聞いたことがあった。

『どうしてそんな顔をしているの？』

『あの穴の向こうには、何があるの？』

けれど、穴から出てきた仲間は、僕を見つめて、こう言った。

『知らないほうがいいこともあるんだよ』

その言葉の意味はわからなかったけれど、僕はなんだかそれが人間と関係しているような気がしていた。

そんなある日のことだった。

また真っ暗な夜が来て、僕にとってはいやなことに、月も星も見

えない、どんよりとした時間の中、ある橋の下まで僕は流れきていた。

橋の上に、こちらを見ている人間がいるな、そう思った瞬間。その人間は、川に向かって、飛び降りたのだった。

突然の衝撃を与えられて、僕は驚き、飛び跳ねた。その僕らを押し込みながら、沈んでいくその人間。なんだか怖くて、不安で、僕はその背中を押し上げた。僕力なんかでは、びくともしなかつただけけれど。

静かな川に巻き上がった飛沫の中で、口々に驚きの言葉を叫ぶ仲間たち。

その中で、一人だけ、冷たい声で言ったものがいた。

『僕らの未来を絶つておいて、よくもこんなことができるものだ』

その言葉の意味がわからず呆然とした僕の隣で、おじいさんは悲しげな顔をして、黙っていた。

沈みかけた人間は、結局たくさん集まってきた人間たちによって救われたようだった。

僕はなんとなくほっとしたけれど、心の隅に暗い影のようなものが一点、落とされたような気がするのだった。

たくさん、たくさん人間たち。

忙しそうで、でも悲しそうで、不思議な生き物。

もしかして彼らも、自分たちがどこから来たのか、どこへ行くのか、わからないのだろうか。

僕の心に生まれたそんな疑問。

それは、僕の中で、人間という奇妙な生き物を、近く感じさせる気がした。

流れ、流れて、そんな疑問も忘れかけていた頃、突然事態は大きな変局を告げた。

ある大雨の日、あまりに大量に流れ込んだ仲間たちに押されて、僕はあの暗い穴へ流されてしまったのだ。

ゴウ、ゴウ、とすさまじい音と勢いにのまれて、僕は普段の何倍もの速さで穴の中を駆け抜けた。

そしてあまりのスピードに疲れ果て、何がなんだかわからないうちに、ある場所へと辿り着いた。

人間たちが集まった、建物の中。何かの薬をたくさんたくさん入れられて、いろんなところを通り抜けて、僕はまた流れ出す。

そして気がついた頃には、またどこかの暗い場所を流れていた。

流れのゆるやかさに落ち着いた僕だったが、今度は一体そこがどこなのか気がなりだした。

周りにいた仲間も、僕と同じように不思議そうな顔で、どこにどうなっかってやってきたのかわかっていないようだった。

しばらく時間が経った頃、僕はまた少し速くなった流れに巻かれながら、突然明るい場所に出た。

僕がいたのは、何か透明の物の中のようなだった。

あわてて辺りを見回すと、そこには今まで見たことがない風景が広がっていた。

何か色とりどりの、いろんな形をしたものがいっぱい並んでいて、それはとても窮屈で、でも面白い風景だった。

何より不思議だったのは、上のほうにいつも見えていた、空がなかったこと。

そして僕がいる透明の物の中も、同じようにとても窮屈で、狭かった。

ぎゅうぎゅうに押し込まれた僕らが、ひしめき、揺れて、そして落ち着いた時。

僕の目の前にいたのは　あの、いつも遠くから見ていた、人間だったのだ。

人間をこんなに近くで見るのは初めてで、あまりに突然のことに、なんだかとても不思議で、驚きと興奮でいっぱいの中で、僕はその人間を見つめた。

その人間は、なんだかとても疲れたような、悲しいような顔をしていた。

ああ、まただ　。

なぜ、人間は、いつもこんな顔をしているんだろう。

僕がとても近くで見えるそんな顔に、引き込まれるように見つめていた、その時だった。

その人間が、僕のいる透明の物を持ち上げ、傾けて、僕ら仲間を全部、飲み込んでしまったのだ　。

ぼつかりとあいた、長い長い、人間の穴の中に、僕らはあつという間に落ちて、流されていった。

そうして、ふと気づいた時、僕は今までのように、流れていなかった。

空を見上げて、漂ってもいなかった。

なんだか暗くて、不思議な、静かな場所にただいるのだった。

そこには僕の仲間がいるのかもわからない。僕自身の姿もよくわからない。

ただ、そこにある、ということだけがわかった。

そして、流れ込んできたのは、何か怒涛のようなものだった。

楽しい、嬉しい、面白い、悔しい、切ない、苦しい、さびしい、

悲しい……色々な、色々な気持ちが、たくさん、たくさん、僕の中に流れ込んできた。

あふれかえる激流のような、そんな言葉と思いは、僕の体を駆け抜けていった。

そして、流れ、駆け抜け、押し寄せるようなそれは、僕の心をいっぱいにして、埋め尽くし、あふれていった。

洪水のような不思議な感覚は、僕にひとつのことを教えてくれた。

唐突に頭の中にひらめくように、わかったこと　それは、人間の感情なのだ、ということ。

ただ、漂い、流れていた僕とは比べ物にならないほどのたくさんの感情。

川の前でいつも人間が見せていたあんな顔には、こんなにたくさんのものが詰まっていたのか。　。  
驚きながら、その感情を人間と共有していた、僕は、その怒涛のような流れの奥底に、一つの思いを見つけた。

それは、驚くべきことに、僕がいつも持っていた疑問と同じものだったのだ。

『僕は一体どこから来たの？』

『なぜ、こうしているの？』

そして、

『僕らは一体、どこへ行くの？』

ああ、やっぱり、同じだった。

僕はなぜか嬉しい気分で、納得していた。

人間も、僕も、同じなのだ。

漂い、流れていく時間。  
いつも繰り返している、こと。  
なぜそうしているのか、何のためにそうしているのか。  
僕にも、人間にもわからないのだ。

そう、僕が深いところで人間と繋がったような気がした、その時  
だった。

僕はまたどこかからやってきた熱い、不思議な流れに乗って、突  
然、外に飛び出したのだ。

流れ落ちた瞬間、人間の大きな瞳が見えた。

悲しげな、苦しげな、その瞳。

僕はそこから飛び出して、流れて、落ちて、そして

全身が何か、形のない、やわらかいところへ溶け出したような気  
がした。

自分の輪郭が崩れたような、それでも不思議と心地いいような、  
懐かしいような、ふんわりとした感覚に僕はいつの間にか包まれて  
いった。

人間も、色とりどりのものたちも、遠ざかっていく。

どこを、どう通ったのか、僕はただ、ふうわり、ふうわりと、上  
っていくのを感じていた。

そして、随分とそんな感覚に慣れた頃、僕は自分の真下に広がる  
世界を見た。

遙か下に、いつも見ていた建物や木が、そして山や川が見える。  
人間たちは、遠すぎて見えないけれど、それでもきつといつもの  
ように、動いているんだろう。

嘆き、悲しみ、流れながらも。

透明な、姿かたちになつた僕は、気づいた。  
そうか、ここが空なんだと。  
いつも自分が見上げていたところに、僕はいるんだ。  
ふと気がつけば、周りには自分と同じように、透明な仲間たちが  
たくさん浮かんでいた。

同じように空の中で漂いながら、僕は下の世界を眺めた。  
どこか疲れたような、さびしいような色をまとっているようにも  
見える世界。

僕は、ずっと以前、誰かが言った、あの言葉を思い出していた。

僕らの未来を絶つたのは人間だと。

その意味はよくわからないけれど、人間たちのいる建物から届く、  
色々な、不快な匂いや、煙、そして奇妙な天気には、いつしか気が  
つくようになっていた。

周りで浮かぶ仲間たちも、少し苦しそうな、そんな表情をしてい  
る。

それでも、僕は人間を嫌いにはなれなかった。

狭く、息苦しいあの空間で、見たあの人間の瞳が忘れられなかつ  
たから、かもしれない。

川の近くで人間が見せる、悲しい表情の意味を知ったから、かも  
しれない。

そして、ただ純粋な、美しい笑顔を見せる子供たちを知っていた  
から、かもしれない。

浮かんで暮らす、空の中は、それでも下から見た時より何倍も美  
しかった。

夕日が染める、優しい、空の中から見下ろす時。

世界はやっぱり、綺麗だった。

そんなある日、僕はたくさん仲間たちと合流した。透明な仲間たちが集まって、押し合って、もみあって、そして、いつの間にか僕は、以前の姿を取り戻そうとしていた。ゆらり、と体が動いた瞬間、僕はあっという間に、滑り落ちるように、下の世界へ落ちていった。

落下していきながら、僕は気づいていた。

そうか、今の僕らが雲だったんだ。

いつも川の中で見上げていた、あの白い雲は、僕らの仲間だったんだ。

だから、どこか似ているような、懐かしいような気がしたんだ。

地上へ、地上へと舞い降りていきながら、僕は感じる。

また、戻っていくのだと。

いや、戻っていたところから、また出発したのだろうか。

そして、僕は思ったのだ。

僕らはこうして、どこかを流れ、漂い、落ちて、吸収され、また上り、落ちる。

ゆるやかな、一本の道を辿っているようだ。

なぜ？

どうして？

そして、どこへ行くのか　そんな疑問は解けぬまま、それでもこうして廻り続ける。

それが僕らの、流れなのだ。

あの、人間の悲しみ、苦しみ、そして喜び　それもまた、同じ

ように流れていくものの運命たぎめなのかもしれないと。

僕らも、人間も、さまよいながら、苦しみながら、流れていくのだ。

どこから来たのか、どこへ行くのか、悩みながらも、生きていくのだ。

いつから始まったのか、どこまで廻っていくのか、誰も知らないけれど。

それでも僕らは廻り、上り、また落ちて、流れる。

それが僕らの、道である限り。

僕はまた、新たな旅を始めながら、思う。

この次、雨となって、地上に降りそそぐ時、

この次、人間の喉を潤す時、

そっとささやいてあげよう。

あなたは一人じゃないんだよ、と。

僕がいるよ、と。

あなたも、僕も、同じなんだよ。

この綺麗な、悲しい世界で、ともに巡り、廻る命の仲間なんだよ、と。

そう言って、笑ってあげるんだ。

ただの水の、

ひとしずくの僕だけだ。

(後書き)

初めて企画小説に参加しました。

「水」をテーマ、ということ、思いついた「水」そのもののお話ですが、いかがでしたか？

未熟な点は多々あるかと思うのですが、書きたいテーマは表現したつもりです…。

ご感想、もちろん、辛口コメントなどお待ちしています。  
よろしく願います。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1069d/>

---

水の、ひとしずく

2009年3月24日09時11分発行